

コミュニティ宗教におけるシンボル
——南スラウェシ省アンパリタにおける事例——

前 田 成 文*

A Preliminary Report of a Study on Symbolism among the Buginese

Narifumi MAEDA

This is a report on a preliminary field survey in carried out Desa Amparita, Kecamatan Tellu Limpoe, Kabupaten Sidenreng-Rappang, Sulawesi Selatan over a period of three months from December 1975 through March 1976. The paper aims at clarifying the present situation of the Tolotang, a community-religion based on pre-Islamic beliefs, in Amparita through historical perspectives and the study of symbolic expressions of the Tolotang among the other Buginese.

I 序

1. はじめに

人間はある「もの」を同定するために、その「もの」そのものではない何か他の「もの」でそれを表わしてきた。人間文化の栄光も悲劇もこの「とりかへばや」物語から生じてきたともいえる。取り替えにあたっては、「もの」そのものより、むしろ「もの」と「もの」との関係のあり方が問題となる。自己を同定するのに、自分の名前、服装、身体的な特徴など、自己の一部をもって自己を同定するのと、自分はライオンであるというように同定するのとでは大きな違いがあるという。¹⁾

ある「もの」を同定するということは同定した「もの」以外の「もの」でないことをも示している。「この世」といえば、「この世」でない「あの世」の可能性を包含し、自己を同定すれば、他人を措定することを前提としている。一に同定することはそれに所属することあるいは関係あることであり、ここに「属」あるいは「縁」の問題が必ず生じてくる。自己は何であるか？ という問は、自分の周囲の人は？ ブギス人とは？ 人類とは？ という問にそのままつながっていく。この連続の中で捉えられた言い換え (transformation) はメトニミーにすぎない。一方、自己を他の人間に比べられないそれ自身の存在としてとらえることも可能

* 京都大学東南アジア研究センター

1) Leach 1976. なお Fernandez 1974 および Superber 1975 参照。

である。この連続の絆を断ち切った所にメタファーの世界が生じる。「自分は日本人である」という同定の仕方も、「日本人」というカテゴリーが世界の他の人間とはまったく種類を異にする「他のもの」であるとされる時に、強力なシンボル・象徴として働き得る。日本人ということが、普通に使われる意味と全然別の次元の意味をもつことになる。シンボル・象徴ということばを我々はこのような場合に限定して使いたい。²⁾

このような意味のシンボルは、必然的に、いわゆる宗教と呼ばれる生活領域と深い関わりをもつ。本報告は南スラウェシにおける Tolotang と呼ばれるコミュニティ宗教³⁾の予備的な考察である。世界宗教といわれるイスラームの波の中で、小さな島のように存続する伝統的宗教のシンボルの強さ・深さの研究の手掛りとして、予備踏査の報告ではあるが、細部にわたる問題を掘りおこしていくための展望としての序論でもある。

現地調査は1975年11月より1976年3月までインドネシアにおいて文部省科学研究費によって行なわれた。⁴⁾ 調査対象となった村には、しかしながら、約3カ月間しか住みこめず、またブギス語も十分にマスターされなかった。

2. ブギス人と調査地

いわゆるブギス・マカッサル族と通称されるインドネシア人の一群は、南スラウェシに居住する。16,7世紀、マレー半島からオーストラリア北部までインドネシア海域各地に植民地を作るなど海の民として知られ、その勇敢さ、冒険精神で有名である。⁵⁾ マカッサル人は昔の Goa, Tallo 王国を中心として南スラウェシの南端のほうに居住し、人口は約150万といわれる。マカッサル人と隣接してその北にはブギス人350万が住み、南スラウェシの北部山岳地帯にはトラジャ人約50万、西北にはマンダル人50万が住んでいる。⁶⁾ マカッサルとブギスとが一括して呼ばれるのが多いのは、言語も近いし、文化・社会組織などが相似しているからである。その他のトラジャ、マンダル語を含めて、南スラウェシ祖語を構成しようとする試みもみられる。⁷⁾ 南スラウェシにおける諸文化のより精密な体系的比較整理も今後の課題であろう。

2) Schutz 1962 参照。

3) van Baaren 1975 の用語に従う。

4) 昭和51年度海外学術調査(研究代表者:飯島茂教授)研究分担者。この調査のために組織された東京外大A.A.研の「アジアの原構造」プロジェクト参加者ならびに調査隊員からの多くの知的刺激に感謝したい。調査の機会を与えて下さった飯島教授、ならびにジャカルタにて調査上の便宜をはかっていただいた京大東南アジア研究センター・ジャカルタ連絡事務所の坪内良博助教授(当時)の御高誼にも感謝したい。

LIPI の Koentjaraningrat 教授および Hasanuddin 大学 Mattulada 教授には、調査許可の段階で御世話を受けた。Ujung Pandang では上記 Mattulada 教授および Nurdin Yatim 講師の協力で、地方政府との関係もうまくいき、とくに Sidenreng-Rappang の Bupati は調査に好意的であった。その他多数の方々のお陰で調査が行われたことに対して感謝したい。

5) ブギス族の出稼ぎについては Lineton 1975 参照。マレーシアのブギスに関しては Winstedt 1961, Andaya 1975a, Burridge 1956, Pelras 1972, Maeda 1974 など。オーストラリアに関しては A.A. Cense, H.J. Heeren など参照。

6) Mattulada 1974.

7) Mills 1975.

マカッサル・ブギス社会の特徴は社会階層と祖先崇拜であるという。⁸⁾ 伝統的な社会階層は普通、(1)王族、貴族、(2)平民、(3)奴隸というふうに図式化される。⁹⁾ (1)と(2)の間には大きな隔差がある。王族は天孫伝説を唱え、他の地上の民との越えがたい血の相違を強調するからである。征服民族と被征服民族とによる二分組織がこの階層制の根底にあるのか、あるいは単なる双分制度が発達したものであるか、にわかには決めがたいところであるが、王権そのものは *regalia* と密接に結びついてきたことは注意されねばならない。王権の正統性というのは、*regalia* を持つことなのである。*Regalia* を失った王はその支配の正統性まで失うことになる。¹⁰⁾ インドネシア共和国成立後、王族・貴族の特権は剥奪され、身分制はなくなり経済的にも没落したとは言うものの、農村部では特に身分に対する畏敬の念が強く残されている。貴族の称号は好んで使われ、呼称などにも昔のしきたりが残されている。もちろん、政府の役人の地位、軍の位階による上下関係が伝統的な階層制にとってかわって、新しいエリート、新しい階層制を形成しているという事実はすべての人が認識するところである。¹¹⁾

もう一つの特徴としてあげられる祖先崇拜に関しては、イスラームとの関係上非常に興味を引くが、祖先あるいは祖霊の概念、祭祀の在り方など詳しい研究が行なわれているとは思われない。

海の民として知られるブギス人も、その生業は農業とくに稲作である。もちろん、商人、船員、戦士として有名であり、事実地方ごとに商業の上手な国、勇敢な国、学問のできる国などというステレオタイプもブギス内部ではある。しかし住民の大多数は農耕に従事しており、とくに南スラウェシの中部は穀倉地帯ともいわれる。¹²⁾ ちなみに南スラウェシ省は 100,457km² の面積（人口は1971年で5,179,911人）であるが、1971年の水田面積は 515,400ha である。その多くが南スラウェシの北部および南部の山岳地帯を除いた海岸部および中部平野に集中するわけである。

調査地はこの穀倉地帯の一つである Sidenreng-Rappang 県の南部にある Sidenreng 湖の西 (Sadang 河からのかんがいで 2 期作地帯) に位置する Tellu Limpoe 郡の中心となる Amparita 村である。¹³⁾ 1975年での各々の行政単位の人口規模は、同県が約 193,000 人、同郡

8) Chabot 1950, 1967. なお社会階層に関しては Friedrichy 1933 に詳しい。

9) 現代の Wajo を調査した Lineton (1975:192) は王族、貴族、平民の 3 階層にわけた。

10) Andaya 1975 および Harvey 1974 参照。

11) 南スラウェシの旧エリートと新エリートとの関係については、Mattulada 1975:65-77 を参照。

12) Schrieke (1955:5) によれば、14~17世紀の間にマカッサル人は農耕民から(ジャワ人に代わって)航海の民となったという。海賊は1905年頃を境として、汽船の数が帆船の数より多くなると共に姿を消していった (Resink 1968:317-8)。

13) 行政単位の訳は誤解を招き易い。本稿では便宜的に、省—県—郡—村—部落を各々 Propinsi—Kabupaten—Kecamatan—Desa (1974年までは Wanua)—Kampung (1974年までは Lingkungan) にあてておく。なお、スラウェシ島は南スラウェシ、東南スラウェシ、中部スラウェシ、北スラウェシの 4 省にわかれる。南スラウェシ省は 23 県からなる。Sidenreng-Rappang 県は昔の Sidenreng 侯国と Rappang 侯国とが行政上一つにされたもので、7 郡よりなる。

が 15,257 人、同村が 7,945 人である。Amparita での週 2 回の市と、市のたつ周囲の 2 階建長屋店舗 (gardu) 42 戸が近隣の村を含めた市場町の中心となっている。ここで補充しうるのは日常生活必需品に限られており、経済の中心は県都の Pangkajene あるいはむしろ隣県の Pare-Pare 市といえる。

Amparita を調査地として選んだ理由は主として次の三つによる。

- (1) 南スラウェシ省のブギス人居住県である Pinrang, Pare-Pare, Sidenreng-Rappang, Soppeng, Wajo, Bone, Sinjai の諸県庁を訪問したが、その中で Sidenreng-Rappang での県側の調査に対する反応が比較的好意的であったこと。
- (2) 集落の歴史が古く、市場町的な様相をおびながらも、伝統的な慣習が強く残っていること。
- (3) いわゆる Tolotang と呼ばれているコミュニティ宗教の中心地であり、イスラームとの競合地域でもあること。

II テー タ

3. Tolotang の意味と信徒

TOLOTANG というのは tau lautang がなまったものといわれ、tau と lautang に分解される。Tau は人を意味する。例えば有名なトラジャ族というのも、riaja (上から) の人ということである。Lautang は南を意味する。¹⁴⁾ これは後述するように、これらの人々が Amparita あるいは Amparita 川、あるいは Amparita の要塞 (benteng) の南側に住むことになったので、そう名付けられたとされる。これに対し、Tolotang の中心的人物の一人の説明では、To というのは人の意味ではなく、木または源を意味していて、元来 Tolotang というのは信仰の名前そのものであって、イスラーム以前から決められていた名称だという。¹⁵⁾ Tolotang という語は現在では人々ならびに信仰の両方を指すのに用いられている。語源がいずれにしても、その信仰の中心は Sure' Galigo と呼ばれる神代記 (I La Galigo によって伝えられたとする神々の物語) に基づく前イスラーム期の伝統的ブギス信仰である。従って Tolotang はイスラームではないという立場をとる。

トラジャ族を除いた南スラウェシ省はほとんどがムスリムによって占められているものの、所どころにイスラームを受容していないコミュニティが残っている。Tolotang のほかに、例えば半島の南東端の Bulukumba 県の Tokajang あるいは Amma Toa は Pantuntung と呼ばれる信仰を堅持しており、その他小規模な非イスラーム信仰集団として Table 1 のようなものが報告されている。これらはすべてブギス・マカッサル族であるが、逆にそれ以外の山

14) Mattulada 氏によると海の意味であるという。Sidenreng では本文のように解されている。

15) Uwa' Langtik, 1976年2月10日。

Table 1

名 称	中 心 地	信 者 数	教 義
Karaeng Caddiya	Maros	1,000	不 詳
Makdi Akbar	Selayar	1,426	〃
Illallah	Jeneponto	不 明	〃
Shalat Maut	Takalar	81	〃
Karaeng Serrea	Jeneponto	不 明	〃
Allajangengge	Bone	〃	〃
Guru Togo	Bone	〃	〃
Tuang Kabbeng	Maros	〃	〃
Bawakaraeng	Maros	〃	〃
Papesse Mata	Soppeng	〃	〃
Illalahud	Maros	11	〃
Belawa	Soppeng	不 明	〃
Puang Malluru	Pinrang	9	祖先より
Tumbu' Tallua	Bulukumba	67	不 詳
Warga Sejati Kerahayuan	Ujung Pandang	39	〃
Ajaran Pembahasan Dua Kalimat Syahadat (Faham Tallu)	Majene	30	祖先より
Warga Swarga	Maros	100	不 詳

Source: Mattulada 1976, Table 1 Aliran-Aliran Kepercayaan dan Tare Kat di Sulawesi Selatan から抜粋。

岳民がムスリムの場合には Enrekang の To Duri という様に 特殊なグループ扱いをすることもある。

Tolotang の信徒はブギス人に限られていて、異種族の人間あるいは南スラウェシ以外の土地の人が Tolotang に改宗したという例はない。その信者数は Tolotang 側は現在80,000¹⁶⁾と称し、1969年の報告では35,000人¹⁷⁾と言われる。Tolotang 人口が明確に把握されているのは Sidenreng-Rappang 県だけのようで、Wajo 県では5,000人くらい、¹⁸⁾ その他の Pinrang, Pare-Pare, Soppeng, Ujung Pandang などごく少数と言われる。一般に流布されている数字は、純粹の Tolotang Asli とイスラーム儀礼をとり入れてムスリムに近くなっている Tolotang Benteng を明確に区別していないために混乱を生じており、Tolotang Benteng のほうは多くはイスラームとして報告するようである。

1969年7、8月にマカッサル教育大学(IKIP)の学生によって行なわれた Sidenreng-Rappang

16) Uwa' Tobo Tywu, 1976年3月16日。

17) IKIP 1969:581。この数字は Tolotang 信者の Makatungeng 氏による。

18) Muchamad Arief 1973 に引用されている Buku Laporan Tahunan Jawatan Penerangan RI Propinsi Sulsel 1970/1971 (Makassar 1971, No. 9b, 9d) による。

県における5カ年計画サーベイ¹⁹⁾によると、同県での純粋の Tolotang は5,289人である。Tolotang Benteng あるいは同書で Islam Tolotang と呼ばれているグループは除外されている。これに対し、1972年の年初に出された宗教局の報告によると、Sidenreng-Rappang 県（人口181,413人）には9,869人が Tolotang として登録されているという。²⁰⁾ さらに1976年に出された広報によると、1974年でムスリム172,143人、キリスト教徒173人、Tolotang 信徒 (Aliran Towani / Tolotang) 12,784人である。

Amparita 村での Tolotang 人口は IKIP の1969年の調査では2,386人 (34.2%) をしめており、Islam Tolotang すなわち Tolotang Benteng は1,660人 (23.8%)、ムスリムは2,935人 (42.0%) にすぎない。1972年の宗教局報告では、4,016人 (50.6%) が Tolotang 信者とされているが、この中に Tolotang Benteng を含むのか否かということは明らかにされていない。1975年5月現在の村役場での集計によれば、純粋の Tolotang Asli は1972年の数字とまったく一緒の4,016人 (50.5%) となっている。この集計では Tolotang Benteng はイスラームとして扱われている。村人口は6人増えているだけである。しかし上部行政単位の郡人口は13,430人から15,257人に増加している。

宗教人口の決定には種々の困難がつきまとう。今回の調査では、準備段階として、家単位ごとに宗教別にぬりわけて、家屋数から各宗教信者の比率を求めたのみである。Table 2 はその集計を示している。ムスリムが Tolotang の家に婚入してきたというようなマージナルなケースも見られるが、大きな誤差はないと思われる。1969年と比較して、Tolotang Asli と Tolotang Benteng の比率が変わってきているのが注目される。

4. Amparita

Tellu Limpoe 郡はその名が示すように三つの村から成りたっている。²¹⁾ Amparita (1971年

Table 2 Number of Houses by Religion (as of Feb., 1976)

	I	B	A	Total
Kampung I	267(74.2)	35(9.7)	58(16.1)	360(100.0)
Kampung II	83(16.4)	59(11.7)	363(71.9)	505(100.0)
Kampung III	230(37.4)	49(8.0)	336(54.6)	615(100.0)
Total	580(39.2)	143(9.7)	757(51.1)	1,480(100.0)

Note: I=Houses of Muslims
B=Houses of Tolotang Benteng
A=Houses of Tolotang Asli

19) IKIP 1969:361 および 489. この調査は大学生が直接面接して聞き取り調査を行なったものである。当時の Tolotang に対する厳しい情勢をも考慮せねばならない。5.v. 項参照。

20) Asaf 1972:15-6. この数は Sidenreng-Rappang 県統計庁の数字に基づく。

21) この名前は1961年に3村を合併して郡とする時につけられたもので、limpoから想像されるような伝統的なものではない。

人口7,940人), Masepe (人口4,634人) および Teteaji (人口2,856人) である。Amparita はその中の中心地で郡役所の所在地でもある。他の2村には Tolotang の信者が1名もいない。3村の各々人家から人家までの約1キロの間は水田で隔てられ、村の領域は極めて明確である。

Amparita村はさらに三つの部落(kampung)に分けられ、各々I, II, IIIと呼ばれる。²²⁾ 各々の部落は二分されて、RK (Rukun Kampung) I と RK II とにわかれる。RKの下に3ないし4のRT (Rukun Tetanga, 隣組) が最下位の単位としてある。

地図は Amparita の居住パターンを示したもので、北側は部落I, 東南側は部落II, 西南側は部落IIIである。Amparita 村の領域は実は地図に見られるよりももっと広く、飛び地の集落も含む。北方約1.5キロのところPanrengnge と呼ばれる約40戸の集落がある。これは部落Iに属する。部落IIIもその西方に小集落をもっている。これらの集落は地図には含まれていない。軍事治安が悪くなる前には、ほうぼうに小集落が散在していたようであるが、独立後のゲリラ戦時代にほとんどが比較的安全な Amparita に住居を移した。²³⁾ Amparita の、ことに南および西の住居はこのような人々で占められる。ごく最近までは水田であった所でもある。部落IIIの飛び地は、昔の居住地に戻っていった人達の集落で Tolotang 信徒である。部落IのPanrengngeにはムスリムだけしか居住していない。1963年に西端の家から発生した大火が部落II, IIIのほとんど大部分と部落Iの南東部とを嘗めつくした。新来者が多い上にこの大火のために、南・西・東の周辺部には未だ貧しい粗末な家が多い。

この分布図をみると、北側にムスリム、南側に Tolotang という感じが強いが、詳細にみればかなり入りくんでいる。住民にとっても、明確に Tolotang の地、イスラームの地といった土地の区分は存在しない。北側にある墓地も共同で使われている。ここでも Tolotang の墓の集中している所、イスラームの墓の多い所は明らかであるが、墓地がそのように区分されているのではなく、親族関係の濃いもの同士が近くに埋められるので、自然とそのような区分をもたらしめているにすぎない。言いかえれば、宅地にしろ墓地にしろ、Tolotang だけ、あるいはムスリムだけ使用してもよい所とか、逆に使用できない所というのは無い。数字の上だけからみれば、既述のように Amparita 村での Tolotang の比率は50.5%であるが、村単位でもっとも集中度の高いのは、Watang Pulu 郡にある Arawa 村の54.5%である。²⁴⁾ 部落レベルでは部落IIが71.9%と高いが、Watang Sidenreng 郡にある Kanyuara 部落は1969年においてこれよりも高い78.3%を示している。²⁵⁾ さらに下位の単位である RK レベルでも Tolotang だ

22) 古い地名としては、Arateng, Lasalama, Todanpulu, Labukku, Ribolangなどがあり、現在でも使われることがある。

23) 以下、単に Amparita と言う時は、これらの飛び地集落を除いた中心部だけを(次ページの概念図に示された部分)指す。

24) Asaf 1972 による。

25) 全人口1,960人のうち1,534人。IKIP 1969 による。

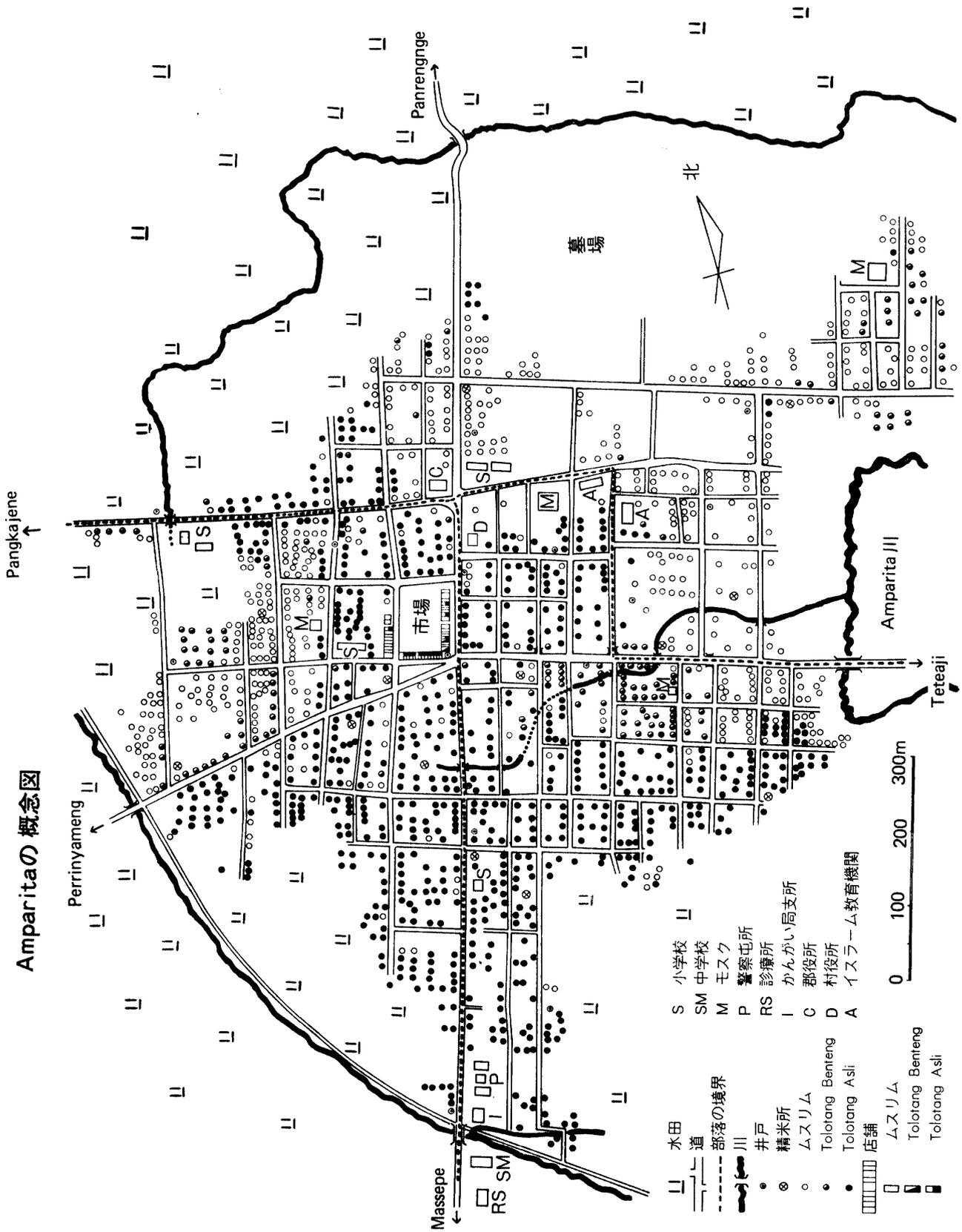


Table 3 Population of Desa Amparita by Sex (as of May, 1975)

	male			female			TOTAL	HOUSEHOLD
	adults	chil.	total	adults	chil.	total		
Kampung I	572	420	992	766	416	1,182	2,194	415
Kampung II	771	483	1,254	918	509	1,427	2,631	536
Kampung III	843	589	1,432	1,021	617	1,638	3,070	571
Total	2,186	1,492	3,678	2,705	1,542	4,247	7,945	1,522

Source: Kantor Desa Amparita.

けの RK というのではない。

Table 3は1975年5月現在の村役場調査の人口である。Table 1の Amparitaにおける家屋数とは必ずしも一致しない。役人、教員などは地元出身もいるが、近隣村あるいは Sidenreng 内からのブギス人が多い。診療所、警察は外来者によって占められ、キリスト教信者がその中に3人いる。市場の店舗経営はほとんど Amparita 出身であり、ムスリムも Tolotang もいる。市日にくる行商は市ごとに移動していく専門の行商と、近隣から作物を売りにくる農民とからなっている。一つ特殊なグループとして、Amparita 川から水を運搬して売る水売りがあるが、これは Bone 県の出稼ぎ者10名前後の仕事になっている。大部分の住民は Amparita 村で生まれ、Amparita 村で育った人々とその親族からなるかなり等質的なコミュニティと言える。しかし、出稼ぎをはじめとして、親族を頼っての出入り・移転などは頻繁に行なわれているようである。

郡長 (camat) は県長 (bupati) から任命される。現在の郡長は1968年現在の県長に任命された。それまでの郡長は3カ月ないし1年くらいで更迭されたという。現郡長は Amparita 村より北のほうにある Watang Tedong の出身で、母が Tolotang からイスラームへの改宗者で彼自身も生まれた時は Tolotang 流の儀礼を受けたという。母は死亡したが Amparita にも多くの親戚をもっている。彼の妻の親族 (Pinrang 県の貴族の出)、父方の親族 (ムスリム) などが Amparita 以外からしばしば訪ねてくるのに対し、母方の親族 (Tolotang Asli) は Amparita にいながら頻繁には訪ねてこないが、何か事があると訪問にきたり手伝いにくる。彼自身は Muhamadiyah であると自称しているが、Tolotang 対策としては、中央のともすれば性急な改宗策に反対して、漸次的な教育による懐柔策を主張する。イスラーム、Tolotang、貴族の三つをうまく操作して安定した指導力をみせているといえる。現役の中尉で、陸軍と県と両方から給料を得ている。

郡長の下に郡長代理、行政、総務、財務および地方政府管轄の保健・森林などの業務をする役人が直属し、その他に教育、広報、宗教など直接中央から指令を受ける出先機関もある。これらの役人になっているのは二、三の Tolotang Benteng を除いてはすべてムスリムであ

る。²⁶⁾

村長 (Kepala Desa) は行政組織の末端にあり、住民の公選によって8年ごとに選出される。1970年の選挙で村長に選ばれた現在の Amparita 村長は、隣りの Wajo 県出身の軍人で、Amparita に在勤しているうちに村人の信任を得て、他の2人の候補者を制して村長になった。ムスリムである。彼の父親は Wajo の部落でオランダ時代からずっと引き続いて部落長である。この Amparita 村長と Teteaji 村長とはともに郡長とゲリラ戦を戦ってきた軍人である。Teteaji 村長もムスリムであるが、その妻は Tolotang Asli で、住居も Teteaji ではなく Amparita の部落 I の西のはずれにある。もう一つの村である Massepe の村長は同村の貴族出身である。

なお、同じ Amparita の村での1966年の村長選挙では2人の候補者が立ち、一方は1,800票、他方は900票を獲得したが結局後者が村長とされたという。これは、前者の所属政党に帰因する政治的な決断だと郡長は説明する。しかし、当事者はそれが Tolotang のラベルのせいであるという。彼は系譜的に純然たるムスリムではあるが、その妻は Tolotang Benteng で、彼自身ずっと Tolotang Benteng の指導者の通辞であったので、一般には Tolotang として見られていたのだという。彼は音楽の才能があってその方面で有名であるが、ある時彼が病気だというニュースを聞いた県長は、彼に病院に入るように勧めたが、「もっとも Tolotang は注射を恐れるからな」といって彼を Tolotang 扱いしたともいう。県長を始めとして郡長、村長レベルには、Tolotang を近代化から取り残されようとしている悲しむべき民びとというステレオタイプが根強くある。

部落長 (Kepala Kampung) には、ムスリム、Tolotang Asli, Tolotang Benteng の三つのグループの有力者 (pemuka masyarakat) が合意する者が選ばれる。任期も俸給もなく、税金などの徴収の手数料が収入となるだけである。部落 I および III の部落長はともにムスリムであるが、72%が Tolotang Asli である部落 II の部落長は Tolotang Asli である。部落 I のと同様兵役経験者である。Tolotang Asli の内部でとくに地位が高いとはいえず、むしろ部落長に任命されたことによって Tolotang 内部での地位が浮上したくらいである。

部落の下の RK, RT のグループごとに長が決められているが、連絡係の役目しか果たしていない。その他 Hansip (Pertahanan Sipil 民警) 組織がある。この統轄者は部落長、村長、県長である。

宗教的には、ムスリム代表という形ではないが、部落、村に Imam Kampung, Imam Desa が行政組織の中に組み込まれている。これとは別に Sanro Wanua (村の呪術師・祭司) の地位も現在に至るまで受け継がれている。イスラームとは全然別であるが、この地位につき得る

26) 以下述べるように村長・部落長のレベルでも Tolotang の任用は少ない。県レベルでも学校教師を除いて役人にはほとんど登用されていない。ただし、県議会および州議会には代議員を選出している。

のは人格高潔とされるムスリムである。Tolotang Asli は対外的には Uwatta Battowae の地位にある者が代表するとされているが、現在はその地位を継承すべき人間が未だ若いので、後見人が Tolotang Asli 代表としてすべての対外交渉にあっている。同様に Tolotang Benteng にも一人の最高指導者が対外的な代表として責任をもっている。例えば共同作業に要する人員を集めるのにも、Tolotang の場合はこれら指導者を通じるほうがずっと能率的で確実だとされる。また重要な問題は、郡長または村長からこれら指導者に相談される。

5. 歴史的背景

5. i. 前イスラーム時代

南スラウェシでは5,000年前といわれる Cabbenge 遺跡が発掘されている。もとよりその時代から歴史時代までを明らかにするような研究はなされていない。プギス・マカッサルの古代史はいわゆる Lontara' と呼ばれている固有の記録文学の完全な解明をまって始めて明らかになる。この中でも特に重要な Sure' Galigo の名をとって、9世紀から14世紀までを Galigo 時代と名づけている。²⁷⁾ 南スラウェシで最も古い王国は北東にある Luwu' だといわれているが、Sidenreng の支配者はこの Luwu' あるいは現在の Tana Toraja から来たと言われる。このような王国の支配者の正統性の原理は、天孫降臨 (Tomanurung)²⁸⁾伝説を中心とする血統と、聖なる神器 (Arajang) の保持ということは既にふれた。Arajang に限らず、その他の崇拜対象である saukang, pantasa などの供養 (puja), 祖先 (attoriolong) 崇拜が信仰生活の基本をなしていたものと思われる。²⁹⁾ イスラームが入るのと前後して、あるいはそれ以前にポルトガル人の影響で Suppa (Pare-Pare), Bacukiki, Goa, Siang (Pangkajene) などにキリスト教信者がいたという。³⁰⁾ しかし、これら一神教が入ってくる前に、唯一神 (Dewata Seuwae) の存在が信じられており、Sure' Galigo によれば世界の始祖は Patotoe と呼ばれており、神皇紀はこの神から始まるとされている (6. iii 参照)。

このようなイスラーム以前の信仰がいかなるものであったかも、Lontara' の詳細な研究に待たねばならない。ヒンドゥイズムの影響の大きさなどという点も、現在残っている非イスラーム的な文化から問題をつきつめていくより、記録にあらわれた限りでの歴史の再現ということが第1次資料とならねばならない。

Sidenreng の王統も、種々の Lontara' からイスラーム以前の王の名前が知られている。1964年に出版された省政府の報告によれば、Addauang³¹⁾ と称された王が6人、Arung Sidenreng と称された王3人がその後が続いて、イスラームに改宗したとされる La Pattiroi は

27) Mattulada 1975. なお, Noorduyn 1961, 1965 参照。

28) インドネシア独立前まで続いた王統は、第三次の Tomanurung を直接の先祖とする。Mattulada 1974, Harvey 1974 参照。

29) Republik Indonesia 1953:593.

30) Mattulada 1976 参照。

31) Akkadauang (=tempat bernaung) の略だという。

第10代と数えられている。³²⁾ 一方、郷土史家 La Side によると、最初の王は Manurungge ri Bulu-Lowa (Lowa 山に降臨した王) で、その娘 Songko' Mpulawengnge が王位を継いで、Wepawawoi と結婚したとされる。Wepawawoi は初代の Bacukiki 地方の王 (Arung Bacukiki) の La Bangenge (Manurungge ri Bacukiki) の息子で、Arung Rappappang 兼 Arung Bacukiki でもある。³³⁾ 前掲省政府報告書では、この Wepawawoi を第6代の Sidenreng の王として、Songko' Mpulawengnge の名はあげていない。その後の La Bata, La Pasampoi, La Pateddungi, La Patiroi に至る王の名前に関しては異同がない。王の称号は各地方によって異なるが、Sidenreng では Addatuang (<datu) がその後定着した。天孫が降臨したとされる上記 Lowa 山は Amparita の北 1km の所にある円錐形の低い山である。ほとんど完全な円錐形をなして、古来から念願成就祈願の聖地として信仰されていて、現在でも遠方からわざわざ参りにくる人も多い。頂上まで一直線の道が東側にあり、15～20分くらいで頂上に達する。

Amparita の起源は不詳である。この地名の由来については二、三の説明がなされる。通説によれば、ずっと昔この辺りは一面ジャングルであった。北のほうから移動してきた人々はこの地にいたって始めて住めるような土地を見出した。そこで Ampa (初めて、ちょうど) + ri-ita (見られた) と名付けられたのだという。あるいは Tana Toraja から弟を探しにきた兄達がここで出会ったからだという語源説もある。さらには、Amperita (見られた有様) が変化して Amparita になったのだともいう。この説によると、Addauang の前に Attalowa (前掲 Manurungge ri Bulu-Lowa か) という最初の王がいた。彼は南スラウェンをほとんど支配下におくほど権勢を振るったが、ある時、丸い美しい山を作ってその上に家を建てることを思いつき、民衆を働かせて (Selayar 島から土を運んで) 現在の Lowa 山を作った。ところが王の思った通りの山になる前に、民衆はその重労働に耐えかねて王を殺して頂上に埋めたという。ところがこの王殺しのためにこの地方では7年間稲が実らず、人々はバナナの幹までも食べて命をつないだという。8年目に大々的な王への供養をした結果、稲ももと通りのようになった。それ以後この地方は Amperita と呼ばれ、毎年収穫の後には巡礼するようになったという。³⁴⁾

Amparita を支配していたのは Arung Amparita と呼ばれる。Arung Amparita は Addatuang Sidenreng とは直接の血の繋りはないというが、やはり北方からの来住者で、Luwu' の貴族と密接な関係にあるという。Arung Amparita の大きな邸は村の中に残っており、その

32) H. Andy Sapada Mappangile 1964.

33) La Side 1974.

34) Hasan Pulu 氏による。この話は Lontara' (すくなくとも Sure' Galigo) にはのっていないという。話手の Hasan 氏は歴史に関する知識が豊富で、小学校長を勤めている。面白いことには、現在の県政府も Attalowa のように、この山頂に Rest House を建てる案を立てたが、この山を聖地とみる人々の根強い反対で実現しないという。

子孫が今でも住んでいる。

5. ii. 初期のイスラーム化

南スラウェシでのイスラームの弘布は、港々から徐々になされた漸次的な波と、象徴的な里程としての王の改宗とそれに伴う民衆の改宗の波の二つからなされた。前者は後者が成り立つための基盤となって歴史の中に埋まってしまい、我々が知りうるのは後者の過程だけである。イスラームを最初に受け入れたのは Luwu' の1603年、次に Tallo の1605年、Goa の1607年で、他の王国は Goa 王からの圧力もあって、1609年に Sidenreng, 1610年に Wajo, 1611年に Bone の各王が入信している。³⁵⁾ その後ミンナカバウ人の聖者が布教活動をすることになるが、とくに北のほうではスーフィズム的な要素を強く示し、前イスラームの Sawerigading や Dewata Sauwae 信仰と結びつく形でイスラーム化が進行した。³⁶⁾ このような土着信仰との融和もあって、イスラームの受容のされ方は民衆レベルではまちまちで、中にはイスラームを拒否したものもいるし、あるいは Allah を Dewata Sauwae に置きかえただけで実質上は伝統的な信仰を保持しているという場合もある。³⁷⁾ Wajo の Kampung Wani の人々はイスラームを拒否したグループである。彼らは、イスラームを強制する Wajo 王の下に居られなくなって、Amparita に移住してきたという。Amparita の Tolotang を Toani と呼ぶのは、Wani の人 (To Wani → Toani) という意味からきている。

Wani からの移住については次のような諸説がある。

- (1) 元来 Tolotang は Sidenreng に住んでいたのが、イスラームが入るずっと以前に、疫病が流行したのでほうほうに移住していき、その多くは Wajo に定着した。Wajo の国がイスラームとなってから、それを嫌った人々が再び Amparita へ戻ってきたのだという。³⁸⁾ この説によると、Tolotang は Amparita の原住民であるということと、Amparita への移住が1610年頃であるということの2点が特徴である。前者の点は、Tolotang がどうして特に Amparita を移住の地として選んだかという問題に対して、昔から Wani と Amparita とは血縁関係があったからだという現在の Tolotang の説明と整合する。
- (2) 1609～1615/20の間のある時期に Tolotang は Wani から移住して来、まず Amparita の野で Arung Amparita と会見して、後に述べる「約束」をこの Arung ととりかわし、最終的な Sidenreng 王の許可は、当時の経世済民の賢者 Ne Malomo の尽力によって可能となったという。³⁹⁾ Ne Malomo (1530～1615/20, その墓は Allakuwang または Wattang

35) Mattulada 1976:Chap. 1.

36) *Ibid.*:29.

37) 例えば、Luwu' 県の Malili の近くの Cerekeng では、pua' と呼ばれる祭司集団が現在でもイスラーム教徒と主張しながら、伝統的な祭祀活動をもって真のイスラームであるとしているという (Andi Anton, Belopa の話)。

38) IKIP 1969:481.

39) La Side, 1975年12月12日, Ujung Pandang, インタビュー。情報源は Lontara' に基づく彼自身の歴史の研究。

Sidenreng) というのはトラジャ地方の Sangalla から来た賢者で、その業績とされる逸話は数多く、古代の民主主義の鏡とたたえられている。その結果後世になって彼のした事ではないことも彼の逸話とされる傾向もある。Amparita の関係者は上記の Tolotang 来住と Ne Malomo との関係を否定している。ただ注目すべきことは、Tolotang が Addatuang Sidenreng ではなく、Arung Amparita と誓約をまじえたという点であり、Amparita における Arung と Tolotang との関係を知る上で重要ではある。

(3) 1666年に Potta Matowae という Wajo 王が、その民衆すべてに対しイスラーム教徒となることを強制する布告を出した。この時に、I Pabbare に代表される Toani (Wani の人) は Wajo を離れる決意をし、Amparita に来た。当時 Massepe にいた Addatuang La Patiroi に請願して居住許可を得たという。⁴⁰⁾ Addatuang La Patiroi は1605年から1611年に王座にあったとされているので、上記年代とは合致しない。また Wajo 王の Petta Motowae というのも単なる称号にすぎず、実名が記されていないので同定は困難である。⁴¹⁾ Wani からの移住の際の指導者は I Pabbare のほかに I Goliga という人がおり、この人は Bacukiki に移り住みそこで死んだという。⁴²⁾

(4) 他の説によれば、Wajoでイスラーム法をすべての分野に適用すると決定したのは Arung Matowa Wajo の La Cella で、この際にイスラームを奉じないグループが反発し、1648年に大規模な逃散を行なった。Sidenreng でこの逃散者と誓約書をかわしたのは Ne Malomo で1649年のことであるという。⁴³⁾

(5) イスラームの正式に認められる二、三年前から、少しずつ Wajo から Sidenreng への移住者が続いた。その頃の Wajo の王は Toddaman という。Amparita の誓約は多分1639年になされたという。⁴⁴⁾

Tolotang-Toani がいつどのようにして Amparita に来たかということは重大な関心事でもある。それは一つには Tolotang Asli と Tolotang Benteng との Asli 論争にも関係するからである。それはともかく、反イスラームのグループの大移動があったのは、イスラームが王に受け入れられた時点ではなく、実際に王から民衆へのイスラーム信奉への強制があった時期(17世紀前半)と考えられる。その反イスラームのグループは単に Wani だけではなくたろうということも推測されるが、ともかく Amparita に来住した人々は、Wani から徒歩で、あるいは馬で、あるいは舟で永住の地を求めてやってきた者の子孫であると信じている。その

40) Asaf 1972. この報告は、宗教局から派遣された著者が1972年1月3～4日に Amparita で行なったインタビュー(氏名不詳)に基づく。必ずしも Tolotang に好意的な報告ではなく、この全文を Tolotang 関係者に見せないようにとの注意を受けた。

41) Abdurrazak 1964.

42) Taijeb & Makkatungang 1966.

43) H. Andy Sapada 1964, p. I/13.

44) Hasan Pulu 氏。彼は Tolotang Benteng の指導者であった故 Uwa Ponreng から聞いたという。

時の Wani の人口、指導者あるいは追随者の属した社会階層・社会関係なども不明である。移住の年代も、1610, 1649, 1666 あるいは村の人が記憶している 1613, 1639 年とまちまちではあるし、あるいは漸次的な移動が行なわれたのかもしれないが、とにかく移住民であった Tolotang-Toani と Amparita および Sidenreng の王との間に「約束」があったということは歴史的事実のようである。

この「誓約」は、(a) Tolotang は Sidenreng の王（あるいは Arung Amparita）に忠誠をつくしその命に従うこと、(b) 結婚と葬式とはイスラームの定める形式でとり行なうことの二つの条件を Tolotang が遵守する限りにおいて、Tolotang 自身の信仰を護持して Sidenreng に住むことを許すという内容である。(a), (b)を受け入れると約束した Tolotang は、それまでの Toani に代わって、Tolotang という名前を支配者からつけられたという。

なお、ここでもう一つ注目しておきたいのは、イスラーム以前には Lontara' は口承文学であったのが、イスラーム化と相前後して聖クラーンに対抗して文字化されて、Lontara Purukani, Lontara Kati などの聖典が書かれたという説である。⁴⁵⁾

5. iii. イスラームと Tolotang の共存

すでにしばしば Tolotang Asli (あるいは Tolotang-Toani) と Tolotang Benteng (あるいは Islam Tolotang) とについて言及してきたが、実はこの二つの系統がはっきりと分離・対立したのは第2次大戦後のことであって、それまでに両者が別々に存在したかどうかということまで現在は論争されている。Tolotang Asli は、Tolotang Benteng を戦後の異端派として見、イスラームと Tolotang の混交したもので、真の Tolotang の教義を 2/5 しか知らないのだという。逆に、Tolotang Benteng は、Amparita の先住者は彼らであって、Tolotang-Toani のグループは後から来たのだと主張する。実際に戦前においても、貴族の結婚式などの時に両者の間で役割分担があって、Tolotang Benteng は客の接待だけをしたのに対し、Tolotang Asli はその外の見張り、監視などをしたという違いがあったという。

断片的なデータからの憶測が許されるならば、(a) Tolotang Asli と Tolotang Benteng とは Amparita に入植後、何らかの事情で別個の指導者をあおぐようになった分派であると考えるか、(b) Tolotang Asli というのは Sidenreng においてもかなりイスラーム化が進んだ時に移住したグループで、Tolotang Benteng というのは Amparita 在住者の中でイスラームを受容せずに伝統的信仰に固執してはいたがイスラーム式の結婚・葬式をしていたグループと考えられる。いずれにしても、指導者の系譜が異なり、祭事の細かい点では相違があっても、婚姻・葬礼に際して、イスラーム式の儀礼を行なった後、イスラーム以前の慣行に従って諸儀礼を再度取り行なうという二重儀礼において両者同じであったといえる。

一方、ムスリムと言われた人々の場合も、イスラーム以前の諸慣習を多くそのまま残してい

45) Arief 1973.

て、イスラームと Tolotang との間に大きな宗教的・社会的隔絶がそんなになかったのではないかと思われる。ともかく、第2次世界大戦まではこのようにムスリムと Tolotang (Asli にしろ Benteng にしろ) とは平和に共存したようである。

5. iv. Tolotang の分裂⁴⁶⁾

日本軍占領時代の1944年に、礼拝 (sembahyang) をしない者をイスラーム式で結婚させたり、葬式を取り行なうことは禁止するという日本軍政の通達がカディを通じてなされた。⁴⁷⁾ その通達に基づいて、Tolotang はイスラーム式の儀礼をやめて、伝統的な固有の儀礼だけを取り行なうことになった。すなわち、guru と呼ばれる imam による nikah (婚姻締結) の儀礼をせず、uwa と呼ばれる Tolotang の指導者によって結婚が行なわれ、また死者へのお祈りなしに uwa の引導で埋葬されることになった。ところが1944年の年末から翌年初にかけて、当時の Addatuang Sidenreng の La Cibu が Tolotang の指導者である La Samang と La Ponreng の2人を州都に呼んで、先祖の誓約すなわちイスラーム式の結婚・葬式を行なうことを守ることを要求し、両者ともその場では誓約を確認したという。⁴⁸⁾ ところが、日本軍の通達と王の要請との両方に従うと、結局ムスリムにならざるを得ないディレンマに陥って、2人の指導者の一方 La Samang に従う人々はイスラーム式の結婚・葬儀を行なわないという道を選んだ。他方の La Ponreng のグループは、恐らく礼拝の件はあいまいにしたまま、昔通りの二重儀礼を選択した。前者の系統が多数派で Tolotang Asli あるいは Tolotang-Toani と称し、後者の系統が Tolotang Benteng あるいは Ma' Tolotang と言われる。

その後、日本軍の敗戦、独立戦争、ゲリラ活動、Qahhar Muzakar の反乱と続いて、南スラウェシの治安は混乱の状態におちいり、Tolotang 問題は人々の注意をひくところとならなかった。1965年2月3日のQahharの死によって治安の回復が始まり、それと共に上記の問題が Sidenreng-Rappang 県ひいては南スラウェシ省および共和国宗教省によって取りあげられることになる。

5. v. ムハマディヤのイスラーム化

1966年に至って Sidenreng-Rappang 県政府はイスラーム式の結婚・葬式に関する誓約をもち出してきたが、Tolotang Asli 側はこの誓約は Sidenreng の王とかわされたものであって、王制が廃された現在では無効であり、信仰の自由に基づいて彼ら自身の信仰を堅持することを表明し、ここに省政府あるいは軍と Tolotang との対立が表面化した。同時に、共産主義

46) 主として Asaf 1972 による。

47) Sidenreng のカディは Kadi Syech Jamal Padaelo, Imam Amparita は La Palingal。この通達の背後にはムスリムと Tolotang の対立があり、イマムが Tolotang への儀礼を司祭することを拒否したことから発展していったという (Tellu Limpoe 郡長の話)。

48) 日本軍の通達が単にイスラーム通によってなされたのか、地元ウラマなどの扇動によるものかつまびらかにしない。後者の場合、前注のように単なるウラマのヒステリーか、あるいはムスリム側に Tolotang 改宗の意図があったのか、これも明らかでない。

者のスクリーニングで Tolotang の中からも共産主義者として報告された者もたくさん出て、その面からも攻撃を受けた。1966年2月4日付けで県長の告示が出され、(a) Agama Tolotang を Agama(宗教)として認めない、(b) 結婚・離婚は法律で定めた手続に従うこと、という2点が通達された。後者に関しては民事婚による登記を行なえば問題がないわけであるが、前者(a)に関しては Tolotang の代表がジャカルタの宗教省に陳情したことによって問題は複雑化した。宗教省次官の回答は、Tolotang 信仰はインドネシアで認められた宗教ではないとしたのに対し、その3カ月後に出されたヒンドゥー・バリおよび仏教社会指導局長の手紙では、Tolotang をヒンドゥー・バリの一派として認めたのである。後者の見解に対して、南スラウェシの省議会、Sidenreng-Rappang 県議会、軍などが、Agama でない Tolotang の禁止・解散を主張したが、Tolotang の根強い抵抗にあって、いわゆる Operasi Malilu Sipakainge (Tolotang をもとにもどす運動) も結局は失敗に終わる。もっとも強硬に運動を推進したのは軍指令官であり、その先兵となったのは Muhammadiyah の青年達である。1967年頃には、郡長が Tolotang 全部を集めてモスクで礼拝を強制しようとしたり、死者を葬る直前に遺体を無理矢理モスクに運ばせて最後の祈りをイマムがあげたり、Tolotang の指導者を郡庁舎に呼んで改宗をせまったりし、これに対し各地の Tolotang が刀などで武装して Amparita に集まり険悪な空気に包まれたこともあったという。

この時期は Tolotang にとって試練の時で、かなりの者が脱落していったとも言われ、Tolotang Asli 自身も礼拝をしないまでもイスラーム式による結婚・葬式を強制されたという。そして伝統的な Tolotang の宗教的行事はムスリムの目を隠れるようにして行なわれたという。

5. vi. イスラーム化と反イスラーム化

現在の郡長が1968年に赴任してきた時には、未だ Tolotang とムスリムとの敵視が拭いさらえず、先にどちらかの者が会議などの部屋の中にいると、他のグループの者は入らずに帰っていってしまうという雰囲気であった。その後、強制的改宗は不可能ということがわかって、政府側も早急な手段によることをやめ、Muhammadiyah のほうの熱もさめて、再び平和共存が続くようになる。

Tolotang Asli としては、上記のような試練のおかげで一種の浄化作用があって、信仰の強い者だけが残ったとする見方もある。Tolotang が Agama であるかどうかという最終的な決着はなされておらず、Tolotang の人の身分証明書の宗教の欄は空白となっている。しかし、一般にはヒンドゥー教の分派 (sekta) として認められるようになってきているし、また Tolotang もそのように認められることを主張している。⁴⁹⁾ この宗教として公認されるかどうか

49) 1976年2月に Tolotang の中尉の軍葬が行われた時には、県長、軍指令官出席の前で、彼の宗教は「ヒンドゥー教」とその弔辞で読みあげられた。

かの問題もあって、表面上従順に役人の指導に従ってはいるが、ムスリムに対しては依然として猜疑の念をもっている。

Tolotang Benteng は、Tolotang Asli と違って、彼ら自身むしろイスラーム教徒として認められようとしている。実際一部の者はメッカ巡礼にまで行っており、モスクでの礼拝をムスリム同様に行なったりしている。しかし、その指導者を始めとして中心的な人物はもちろん、多くの者が礼拝をしない。そして聖典は聖クラーンではなく Sure' Galigo であることも確かである。Amparita 内ではメッカにいった者もいず、イスラームとはいっても比較的 Tolotang としての意識を強くもっているようであるが、他方、他地方に少数で住む者達はむしろイスラーム教徒となっていくのかもわからない。

この三者の混交は周辺域ではあり得るが、依然として画然たる境がある。それは一つには宗教儀礼とくに集会がそれぞれ独自にあることにより、また一つには結婚規則による。もちろん、相互間に通婚がないというのではない。まず周囲からの反対があり、それでも結婚した場合、どちらか一方がその宗教を犠牲にすることが要求される。しかしもとの親族関係がその為に断ち切られるということはない。ところが Tolotang Asli の一派と Tolotang Benteng との通婚は決してないとも言われる。これは昔 Tolotang Asli の男 (uwa) が Tolotang Benteng の女を第2妻として娶ったが、一度きり訪問しただけで、その結果子供が生まれても第2妻の所にはもどらなかつた。これを怨んだ第2妻は、子々孫々絶対に Tolotang Asli とは結婚するなという呪いを残して死んでいった伝説に基づいているのだという。⁵⁰⁾

Tolotang Asli は Sure' Galigo, Latoa などの伝統的ブギス信念体系に基づいて、積極的にイスラーム儀礼から遠ざかろうとし、かつイスラームと対抗しようとする。Tolotang Benteng は、信念体系は Tolotang Asli と共有するが、二重儀礼を行ない、名目上あるいは保身上ムスリムと同一化しようとする。ムスリムは、伝統的な信念体系に基づく儀礼をイスラームで牽強附会するか、あるいはそのような儀礼を頭から否定しようとするが、生活の多くの場面にそのような儀礼を残している。1967年前後ムスリムが Tolotang に礼拝させようとした事実をとらえて、むしろ礼拝を強制される必要のあるのは礼拝をしていないムスリムであると批判した Tolotang の青年の言はけだしの的を射ているといえる。ムスリムが自分自身の信仰に対する不安感をしずめるために Tolotang を迫害したり、単にムスリムとしての体面を保つために Tolotang のイスラーム化をしなければならないという社会的風潮を生みだしたのかもしれない。

6. Tolotang としての象徴的表現

ムスリムと Tolotang とを判別するのは日常生活の上では極めて難しい。衣食住・言語とも

50) Tolotang Benteng 側の伝説。Tolotang Asli からは Tolotang Benteng との結婚は "biasa" (通例の) という。

に外見上はまったく同じといってもよく、Tolotangのほうが古い伝統的な形を残しているといわれるが、これも詳しく観察せねばわからない。数年 Amparita にいる外来者でもムスリムと Tolotang とを混同したりする。これはムスリムからすると、Tolotang であるかないかは直接本人あるいは知人から聞く以外にはモスクに来るか来ないかということで推測せざるを得ないからでもある。逆に Tolotang のほうは、ムスリムに比べて信者の集まりがより密であり、より完全であるので、仲間というのはよりはっきりしている。生活空間を共にしながら、外見上同じムスリムと区別して Tolotang であるということをもどのように表現するかという点について検討してみたい。これは何故 Tolotang がイスラームを受容しないのかということに関して、歴史を離れて考察する道を開くものといえる。

6. i. Uwa の存在

ブギス・マカッサル社会では基本的に三つの身分が認められたということは序の2において述べた。独立前の Amparita にもやはり貴族階級は存在していたが、Tolotang の内部でも同様の階層区分が考えられている。すなわち、(1)貴族階級の Uwa, (2)平民の Tosama, (3)最下層の Ata の三つである。⁵¹⁾ この3層の間の通婚は原則として認められない。とくに女性が彼女より下位の身分にある男性と結婚すると、両者ともに Tolotang の社会の一員として認められなくなるという。男性の場合も地位の低い女と結婚するとその子供は一段低くなるので、上層階級ほど血の純粋を保とうとする。Uwa の中でも血筋の良い系統は内婚傾向が強く、第1イトコ婚の出現度が極めて高い。

Uwa というのは一般ブギス社会では「王族」にあたるのだと説明するが、その影響力は聖俗両面にわたる。すなわち、宗教上の権威者として宗教的儀礼の執行はもちろんのこと、日常生活の相談・忠告、呪医的な役割までも果たす。Tolotang 全体の指導、対外的な代表もこの uwa の1人があたることになる。

Uwa という語は、古ブギス語では、父または母を意味する。⁵²⁾ 現在では、インドネシア語同様、傍系の父母世代親を意味する。⁵³⁾ Amparita では一般に目上に対する尊称として、単なる Bapak よりも尊敬をこめて使われる場合もある。貴族の間では、世代にかかわらず親族内での身分の差と親族関係上の上下関係との齟齬を妥協させるための方便として用いられるという。このような親族名称上の uwa の意味と Tolotang でいう uwa とは混同すべきではない。

Tolotang-Toani の間では、この uwa というのは一つの血統に基づく身分であって、uwa の子供は男女を問わず uwa と呼ばれる。事情をいっそう複雑にしているのが、この uwa という身分から選ばれる指導者の地位 (paso) も uwa と呼ばれることである。この特殊な地位は

51) Tobo Tywu n.d.:9.

52) Matthes 1874. 現在では普通のブギス人はこの古義を知らない。なお、筆者の調査したマレー半島のジャクンの一部のグループで、wah という語が父または母の意味で使用されている (前田1974:157-8)。

53) その綴字は、ua, uak, wak, uwa' などみられる。

Tolotang-Toani では五つ⁵⁴⁾とされ、現在もその地位は前任者の死亡と同時にその子供の中から1人男女長幼を問わず最適者が選ばれ継承される。対外的に Tolotang を代表する職は Uwatta Battoae であり、外部の者はこの職が最高位だと考えているが、Tolotang 内部ではこの五つの職にある者の地位はまったく同格であるという。Amparita 以外の Tolotang 居住地には、そこを代表する代理の uwa がいる。しかし、彼はあくまでも代理であって、住民と uwa との関係は彼を通さずに直接行なわれる。

Uwa は Tolotang 信者にとっては神 (Dewata Seuwae) との仲介者であって、この uwa の仲介なしには死後の生活も保障されない。Uwa が信者を強制するのではなく、信者が来世の為に神から特別の恩寵 (wahyu) を受けている uwa を必要とするのである。

一方 Tolotang Benteng の間では、Tolotang-Toani のように uwa を粗製乱造しないという。このグループの中では、uwa は全体の指導者 (paso) として1人しか認めないのだという。これは、全体の宗教儀礼執行者ならびに対外的な代表者として1人であるという意味で、現実には uwa という語は Tolotang-Toani 同様もっと広く用いられている。

6. ii. Uwa への儀礼上の義務

Tolotang の道 (molalaleng) の一つとして、(1) 来世 (lino paimeng) のため、(2) 子供が生まれた報告のため、(3) 結婚したという報告のため、(4) 死亡したという報告のために、その折折に供物を捧げ (mappenre inanre) ねばならない。報告するのは神 (Dewata Seuwae) に対してであるが、この神へ報告し得るのは uwa だけであるから uwa に供物を持っていく。(1) に関しては毎年、(2)~(4) に関しては事があった直後に、飯、魚、鶏の料理、シレ、ピナンそれに若干の銭をそえて大きな皿にのせ、サロンで覆った裸足で uwa の家に届ける。義務を果たさなかった年の分は翌年に加算される。(4) の死亡に関しては、まず重病になった時 (sakorat)、死んだ時 (nanro leppu)、死後 1, 3, 8 日目から3年目に至るまでの定められた日 (mappenre inanre malliwong) に供物を uwa に出すのが家族の義務である。供物をあげる uwa は個人にとって1人とは限らず、妻の uwa、両親の uwa などに対しても義務を果たさねばならない。⁵⁵⁾

Tolotang Benteng では、この供物は uwa に対してする必要がないとされている。

6. iii. 唯一神と聖典

イスラームの Allah と聖クラーンに匹敵するのが唯一神である Dewata Seuwae と Sure'

54) Uwatta Battoae, Uwatta Galungge, Uwatta Makkunraie, Uwatta Oroane, Uwatta Wawedding. -ta は人称代名詞で、uwatta というのは「我われの(私の) uwa」という意味。

55) Asap (1972:9) によれば、一般の追随者は年収の40%くらいは uwa に吸い上げられていると推定しているが、その根拠は示されていない。もしそうであるとしても、供物の再分配ということも考慮にいれねばならない。これに関するデータは、今回の調査では得られなかった。非衛生的であるという当局側からの非難などもあって、Tolotang は mappenre inanre についてセンシティブで、積極的に語りながらなかった。

Galigo に代表される Lontara' である。Dewata Seuwae は創造神 (To-Palanroe) あるいは運命を定める神 (Patotoe) と呼ばれるが、インドネシア語では Tuhan Yang Maha Esa と訳される。⁵⁶⁾ これが Siva 神であるかどうかは別として、世界はこの神の子孫である Batara Guru, Sawerigading などの神々によって最初に住まわれ、その後で tomanurung と呼ばれる人間が現われたという。この中で Dewata Seuwae によって恩寵 (wahyu) を与えられた人間によって、Sawerigading に端を発する信仰が伝え広められた。それが Toani であり、現在は Tolotang になっているわけである。

Tolotang はこの Dewata Seuwae の信仰と同時に、その神々の事蹟を記し、祭事ひいては日常生活の指針まで書かれた Sure' Galigo を聖典とみなしており、すべてのことはこの中に記されていると信じられている。見方によれば、uwa というのは、この聖典の守護者であり解釈者でもあると考えられる。古い lontara' は一種の arajang ともなる。例えば Tolotang Benteng に伝わる Lontara' は特別の祭の時だけにその指導者によって開きうる門外不出の秘伝である。

6. iv. 結婚と葬式

Amparita の誓約で、なぜ結婚と葬式とが特に選ばれて、それをイスラーム式にすることを Tolotang に強制したかという説明は今となっては推測しかできないが、実際にイスラーム式と Tolotang 式との違いは、司祭が guru (すなわち imam) であるか uwa であるかの違いであるといってもよい。もちろん、現在ではムスリムの結婚式では見られない古い慣習を Tolotang の結婚式 (とくに uwa 階級の) は未だ保持しているとはいえ、基本的には同様であるといえる。⁵⁷⁾ ムスリムの男と Tolotang の女との間の結婚は、まずイスラーム式でイマムの前で婚姻締結 (nikah) し、次に uwa の前で結婚することにより、Tolotang にとっては前者が無効になるのだという。ムスリムの女の場合には、イスラーム教徒たることをやめなければ Tolotang と結婚できないようであるが、これも不可能ではない。

葬式についても、泣き女、棺をのせる輿、それを押し合いして墓地にいかせないようにする儀式などはムスリムの場合には見られないというが、遺体の水灌、白布で包むこと、遺体を戸口から出さず窓から出すこと、南北に長方形に掘られる墓、遺体の置き方などはムスリムと同様である。

結婚・葬式とも手伝い人、参加者が宗教によって限定されることはないが、近隣、親族関係などによって自然に一方に片寄ることはもちろんである。Tolotang の場合はその上 Tolotang

56) 結婚式の招待状などには 神の御名によってという場合、Tolotang も Tuhan Yang Maha Esa を用いる。

57) 例えば、ムスリムは屋外で椅子を使ってお客を接待するが、Tolotang は現在でも家の前壁を抜いて床を継ぎ、大きな広間を作って、そこで椅子を使わずに接待する。なお、Tolotang の結婚については Tjakke 1970 参照。

内部での相互扶助が未だ強く働いているので、ムスリムが手伝いに行くことは稀といえる。ただし社会的に上位の者の時は、他のグループ、宗教からの参加者が多い。⁵⁸⁾

6. v. 礼拝

Tolotangの間ではモスクのような共同礼拝堂はない。人々が集まるのは、uwaの家と墓場とである。Uwaの家は一般のブギス人の家の標準⁵⁹⁾からすれば2, 3倍の大きさがあり、Amparitaでは昔のArung Amparitaの家とならんでもっとも大きい。これはuwaがその信者をいかに搾取しているかという例によく引かれるが、一種の集会所としての機能を果たしているというべきである。そしてこの集会というのは、それがuwaの家であろうと、墓場であろうと、uwaが信者にその教義を説明する機会として重要である。

Tolotangにもmarellauと呼ばれる祈りはあるが、イスラームの様に形式化していない。ムスリムからすれば、sembahyangのあるなしが最も重要なイスラームの基準であることは既にふれた。礼拝に対するTolotangの頑強な抵抗も礼拝の象徴的な重要性を示している。

6. vi. 巡礼

Wajoから移住してきた際の指導者のI Pabbareの墓がAmparitaの西2kmのPerrinyamengにあり、もう1人のI Goligaの墓はPare-Pare県のBacukikiにある。I Pabbareは死ぬ間際に遺言して、彼女の死後毎年1回墓参りにくることを子孫に命令した。これ以後、年1回のPerrinyameng詣では、どんな遠い所においてもTolotang Asliである限り参加しなければならぬ義務となっている。この際に、Bacukikiの墓、故郷のWaniでの墓、その他wahyuを受けたと信じられている人々の墓参も行なわれることがある。

このPerrinyamengの年祭はmanre sipulung(集まり)と呼ばれ、(1)聖別された獣のいけにえ、(2)Massempeといわれる足斗技、(3)I Pabbareの墓のお参りの三つからなる。日取りの決定、祭祀の執行などはUwatta Battoaeの権限である。当日⁶⁰⁾は、I Pabbareの墓が中央にある墓地とその周辺の空地2ha⁶¹⁾に、各地から集まったTolotang Asliがそれぞれの小屋掛けを作り、また来客用の場所も設けられる。(1)の獣はこれらの人の共食用に用いられる。(2)の足斗技は、昔王が来臨した時にその慰みとして設けられたものだという。Tolotang以外の来客の目当てはこれの見物である。昔は大人が参加したが、本当の争いなどに発展したり恨みを残すことが多かったので、最近では年少者(12, 3才まで)に限られ、それも全部で2時間くらいしか行なわれない。

58) 注49)の中尉の軍葬の時には、県長、軍司令官以外に、県・郡の役人やムスリム有力者が多勢参加して行われたが、Tolotang Bentengの有力者は一人も顔を見せなかった。結婚式よりも葬式のほうがより保守的傾向をおびる一つの事例かも知れない。

59) Pelras 1976.

60) 1976年は少し遅れて2月8日(日)に行われた。

61) 2年前から鉄条網で囲まれている。墓地は森の中にある。その他の墓地も鉄条網で囲われるようになった。

この外側の騒々しさとは対照的に、森の中では I Pabbare の墓を取り囲んで信者達が黙然と坐っている。外での Massempe が始まる頃に、uwa に順番に導かれて墓のある柵の中に入り、シレをuwaの前に置き、墓の上にある穴からの泥をシレに塗りつけてもらって祈誓(niat)する。この墓参りは夜まで続くが、終わった人は自由に帰っていく。⁶²⁾

Tolotang Bentengは決してこの年祭には参加しない。それに匹敵するものとして、Amparitaの開村以来あるといわれる Bungingnge Pakkawarue という井戸の周りでの儀礼を行なう。ほぼ9月頃といわれ、各地から Tolotang Benteng がみんな集まってき、その中にはメッカ巡礼をすまして白いハジ帽を着けた人も混じっているという。

その他、ムスリムも Tolotang も区別なく詣でる Lowa 山やその他の泉、墓などの聖地も多くある。

6. vii. 伝統的生活様式

今まで度々 Tolotang は伝統的な儀礼を保持していると述べてきた。このような伝統志向性は、ムスリムと比較した場合、生活全般についてもいえることで、例えばムスリムの家では必ず椅子があるのに、Tolotang では椅子を用いないで板の間に坐ることなどは重要な相違であると考えられている。最近ではタバコにかわってしまったが、ごく少し前までシレ、ピナンを接客用として用いていた。これらの伝統的といわれる生活様式が徐々に日常生活から消えてゆき、儀礼的な時に思い出されるだけになりつつあることも確かである。衣服は日常ではムスリムと変わらないが、より多くの機会にサロンを用い、上述したように mappenre inanre の時には草履をはくことができない。また、オートバイが普及しても、巡礼の時には馬を乗用とする。冠婚葬祭、稲作儀礼などの時には古い伝統的な儀礼に忠実であろうとする。日常的には近代化を受け入れながらも、その節目節目では伝統の様式が残されているといえる。

Ⅲ お わ り に

なぜ、Tolotangがムスリム社会の中でムスリムに吸収されずに存在し得たかということは、逆説的にいえば、Tolotang とムスリムとの相違が非常に少なかったからだと言えよう。それは、ブギスの伝統文化の強さを示すものであると同時に、スラウェシでのイスラーム化が伝統文化の担い手自身である貴族によって稀釈された形でなされたことにもよろう。極端にいえば、最初のイスラーム化はコミュニティ宗教（ブギス文化）によるイスラーム要素の吸収の段階ともいえる。さらには、本稿で十分触れることのなかった階層内婚が、イトコ婚の選好、hypergamy の強調によってうまく機能し続けたことにもよろう。

ムスリム側からの Tolotang を改宗させようとする動きは、スラウェシでのイスラーム化

62) この年祭に参加せず、別に Amparita 詣でを行う Wajo (Uloe, Otting) の Tolotang もいる。これを ukkang と呼んでいる。

が、いまや、ブギス文化（コミュニティ宗教）の中でのイスラームの増殖と純化・拡大の時期にあたっていることを暗示するのかもしれない。Tolotang の将来は、前パラグラフで述べた内的な要因と同時に、Tolotang が政府からヒンドゥーとして正式に認められるかどうかということ、周囲のムスリムが今後どのような反応を示すかにもかかわっている。ヒンドゥーとして認められ、ムスリムも Tolotang を差別視しないような状態になれば、むしろ Tolotang は民間信仰として残存はしても自然にムスリム社会に融合してしまうかもしれない。その逆であれば、迫害されるコミュニティのシンボルとして Tolotang はますますイスラームと対立的な方向を指向していくであろう。それを支えていくのは、(1)少なくともイスラームと同価値をもった一つの宗教であるという確信、(2)すでに過去 300 年にわたってイスラームと共存してそれに併呑されなかったという歴史的な自信、(3)いわれなき迫害に対するルサンチマンなどであろう。Tolotang の宗教的意義よりは Tolotang に帰属しているということが強調され、その内容よりも標示機能が問題になってくる。ある意味では、個人の自由とコミュニティあるいは社会の拘束力との平衡がどのように変化していくかを見ていく上での好個のデータを提供してくれるといえる。

References

- Abdurrazak Daeng Patunru. 1964. *Sedjarah Wadjo*. Makassar:Jajasan Kebudayaan Sulawesi Selatan dan Tenggara.
- . 1969. *Sedjarah Gowa*. Makassar:Jajasan Kebudayaan Sulawesi Selatan dan Tenggara.
- Andaya, Leonard. 1975. The Nature of Kingship in Bone. In Anthony Reid & Lance Castels (eds.) *Pre-Colonial State Systems in Southeast Asia*, pp. 115-125. Kuala Lumpur:MBRAS.
- . 1975a. *The Kingdom of Johor 1641-1728: Economic and Political Developments*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- H. Andy Sapada Mappangile. 1964. *Karja Pembangunan Daswati II Sidenreng-Rappang (1964-1967)*. Pangkajene:Kabupaten Sidrap.
- Muh. Asaf Dalle. 1972. Orang Tolotang di Sidenreng Rappang Sulawesi Selatan. Pangkajene. Mimeo.
- Baaren, Th. P. van. 1975. Religions of Faction and Community-Religions. In W.E. van Beek & J.H. Schere (eds.) *Explorations in the Anthropology of Religion: Essays in Honour of Jan van Baal*, pp. 25-28, The Hague:Martinus Nijhoff.
- Bertling, C.T. 1939. Een Hypothese Omtrent de Sociale Structuur van Zuid-Celebes in Verband met de Stichtingsmythe van Wadjo. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 118:489-494.
- Biro Pusat Statistik, Indonesia. 1974. *Penduduk Sulawesi Selatan*. Sensus Penduduk 1971 Seri E No. 23.
- Burridge, K. O. L. 1956. The Malay Composition of a Village in Johore. *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society*, 29:60-77.
- Chabot, H. Th. 1950. *Verwantschap, Stand en Sexe in Zuid-Celebes*. Djakarta:J.B. Wolters.
- . 1967. Bontoramba: A Village of Goa, South Sulawesi. In Koentjaraningrat (ed.) *Villages in Indonesia*. Ithaca: Cornell University Press.
- Fernandez, James. 1974. The Mission of Metaphor in Expressive Culture. *Current Anthropology*, 15: 119-145.
- Friedericy, H.J. 1933. De Standen bij de Boegineezen en Makassaren. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*, 90:447-602.

- Harvey, Barbara S. 1974. Tradition, Islam and Rebellion: South Sulawesi 1950-1965. Cornell University, Ph. D. Dissertation.
- IKIP (Institut Keguruan dan Ilmu Pendidikan). 1969. *Laporan Survey Repelita Kabupaten Sidenreng Rappang*. Makassar: IKIP.
- La Side Daeng Tapala. 1971. *Riwajat Petta Malampee Gemme'na*. Makassar: Jajasan Lektur Batuputih.
- . 1974. Daftar Nama-mama Arung (Raja) di Sidenreng. Disalin oleh Muh. Salim. Mimeo.
- Leach, E. 1976. *Culture and Communication: The Logic by which symbols are connected*. Cambridge U. Press.
- Lineton, Jacqueline. 1975. Pasompe' Ugi': Bugis Migrants and Wanderers. *Archipel*, 10:173-201.
- 前田成文. 1974. 「マレー半島におけるジャクンの親族名称」市村真一編『東南アジアの自然・社会・経済』所収, pp. 148-173, 東京: 創文社。
- Maeda, Narifumi 1974. The Changing Peasant World in Melaka: Islam and the Democracy in the Malay Tradition. University of Chicago, Ph. D. Dissertation.
- Macknight, C.C. 1975. The Emergence of Civilization in South Celebes and Elsewhere. In Anthony Reid & Lance Castels (eds.) *Pre-Colonial State Systems in Southeast Asia*, pp. 126-135. Kuala Lumpur: MBRAS.
- Matthes, B.F. 1874. *Boeginesch-Hollandsch Woordenboek, met Hollandsch-Boeginesche Woordenlijst, en Verklaring van een tot Opheldering Bijgevoegden Ethnographischen Atlas*. Te 's Gravenhage: M. Nijhoff.
- Mattulada. 1974. *Bugis-Makassar: Manusia dan Kebudayaannya*. Jakarta: Jurusan Antropologi, Fakultas Sastra Universtas Indonesia.
- . 1976. *Agama Islam di Sulawesi Selatan*. Laporan Proyek Penelitian Peranan Ulama dan Pengajaran Agama Islam di Sulawesi Selatan. Ujung Pandang. Mimeo.
- Mills, R.F. 1975. The Reconstruction of Proto-South Sulawesi. *Archipel*, 10:205-224.
- Muchamad Arief. 1973. Kepercayaan Tolotang Toani Ditinjau dari segi Agama Islam dan Hindu. Drs thesis, Fakultas Sastra, Universitas Hasanuddin, Ujung Pandang.
- Mukhtar Tahir. 1975. Peranan Uwatta dalam Kehidupan Masyarakat Tolotang di Kecamatan Tellu Limpoe Kabupaten Sidenreng Rappang. Drs thesis, Fakultas Sospol, Universitas Hasanuddin, Ujung Pandang.
- Noorduyn, J. 1961. Some Aspects of Macassar-Buginese Historiography. In D.G.E. Hall(ed.) *Historians of South East Asia*, pp. 29-36. London: Oxford University Press.
- . 1965. Origins of South Celebes Historical Writing. In Soedjatmoko et al. (eds.) *An Introduction to Indonesian Historiography*, pp. 137-135. Ithaca: Cornell University Press.
- Pelras, Christian. 1972. Mission en Malaisie et en Indonesie, 1967-68. *Asie du Sud-est et Monde Insulindien*, 3(2):135-172.
- . 1976. La Maison Bugis: Formes, Structure et Fonctions. *Asie du Sud-est et Monde Insulindien*, 4(2):61-100.
- Resink, G.J. 1968. *Indonesia's History Between Myths: Essays in Legal History and Historical Theory*. The Hague: W. van Hoeve.
- Schrieke, B. 1955. The Shifts in Political and Economic Power in the Indoensian Archipelago in the Sixteenth and Seventeenth Century. In *Indonesian Sociological Studies*, Part I, pp. 1-82. The Hague: W. van Hoeve.
- Schutz, A. 1962. *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*. The Hague; Martinus Nijhoff.
- Sidenreng Rappang (Regency). 1975. *Monografi 1975*. Pangkajene: Kabupaten Daerah Tingkat II Sidenreng Rappang, Sulawesi Selatan.
- Superber, Dan. 1975. *Rethinking Symbolism*. (Tr. by Alice L. Morton) Cambridge University Press.
- Taijeb dan Makkatungang. 1966. Ringkasan Perkembangan Timbulnja Kejakinan dan Adjaran "Toani" (Tolotang). n.p. Mimeo.
- Tjakke. 1970. Hukum Adat Perkawinan Tolotang/Toani. Drs Thesis, Fakultas Hukum, Universitas Hasanuddin, Ujung Pandang.
- Tobo Tywu. n.d. Hukum Adat Kewarisan Toani/Tolotang. Ujung Pandang. Mimeo.
- Winstedt, R.O. 1961. *The Malays: A Cultural History*. London: Routledge.